

各種サルファ剤の血中ならびに扁桃内移行に関する臨床的研究

大阪医科大学耳鼻科 辻 善弘・中村文昭

抗菌性物質の病巣における組織内分布が、感染症の治療効果を支配する要因として重要視されている。かかる観点から臨床的に最も手術数の多い扁桃予定患者に、従来より使用されているサルファ剤を無選択的に選り投与し、それぞれの血中濃度と術後の扁桃実質内移行度について検討した。

実験方法は各種サルファ剤について既知濃度に対する吸光度を測定し、標準曲線を作製した。まず予備実験として、体重一定の健康男子4名について、各種サルファ剤の中より一種を選び、その投与後の血中濃度(free)を経時的に測定したところ、4時間後に最高血中濃度に達することを知った。そこで以後、サルファ剤投与後4時間目に採血ならびに扁桃を施行し、それについて移行濃度を測定した。

定量法はブラットン・マーシャル法(津田氏変法)に従った。サルファ剤はスルフィソメゾール・スルファモノメトキシ・スルファメトピラジン・スルファメトミジン・スルファジメトキシの5種類を選び、

各サルファ剤につきそれぞれ15例ずつ実験を行なった。

実験成績： 各種サルファ剤の血中濃度と扁桃内濃度の相関関係についてはサルファ剤全般に関してみると、危険率5%において有意の相関関係にある。しかし個々のサルファ剤についてみると、スルファメトピラジンとスルファジメトキシンは有意の相関を示すが、その他のものは相関を認めず、また扁桃組織内濃度と扁桃重量・体重・性別・年齢などは相関関係を示さなかつた。

〔質問〕間宮 敦(名市大)：抗生物質では扁桃の下極よりも上極に近い方が移行がよい傾向があるが、サルファ剤は如何でしょうか。

〔応答〕辻 善弘(阪医大)：その点はまだ十分検討していないので、はつきり答えられないが、結晶としての分布の感じでは濾胞周囲などに多いように思う。